

飼育水温が28℃以上になると、摂餌量は著るしく低下する。とくに高密度区(Ⅰ)では成長が著るしく低下し、体長の個体差が大きくなる。

ヒラメ標本船調査および統計調査について

野 沢 正 俊

ヒラメ採捕の実態を明らかにするとともに、資源量推定のための資料を得るため、標本船調査と統計調査を実施した。

調 査 方 法

標本船選出については、ヒラメ漁獲量の多い小型底曳船とし、操業技術が高度であり、年間操業を実施している賀露漁協所属船5隻、弓北漁協所属船2隻を選出した。標本船には野帖を配布し日誌を依頼した。記録は昭和47年4月～48年3月まで操業毎に投網時刻、位置、水深、曳網方向、曳網時間、揚網水深、魚種別漁獲量、漁場別水深帯別の漁獲状況を調査した。ヒラメの銘柄区分は、大40cm以上(成魚期)、中25～40cm(未成魚期)、小25cm以下(若魚期～稚魚後期)とした。また統計調査は農林水産統計によった。

結 果 と 考 察

標本船の月別水深別ひき網数は表1に示し、漁場の月別の動きを図1に示した。賀露船をみると操業の中心は春期(4～6月)、水深50～60m、夏期(7～9月)100～115m、秋期(10～12月)35～40m、冬期(1～3月)40～60mで夏期分散し深海域に移動し、秋期から冬期接岸している。境港弓北船をみると操業の中心は単調で周年10～30mであり、とくに5～6月は集中操業しているが一部は5～7月水深60m線を操業している。

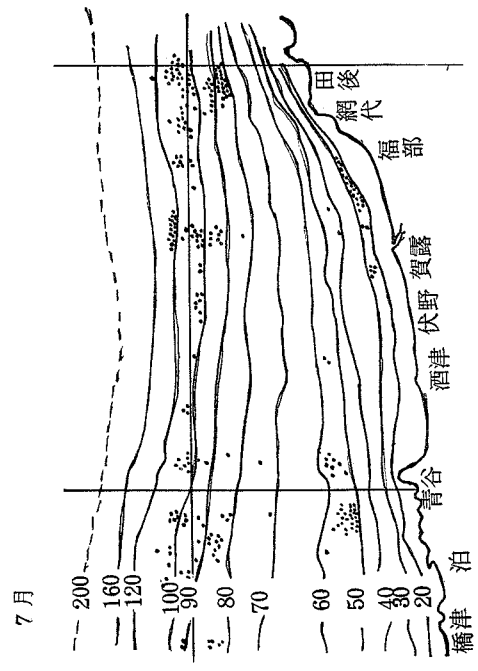
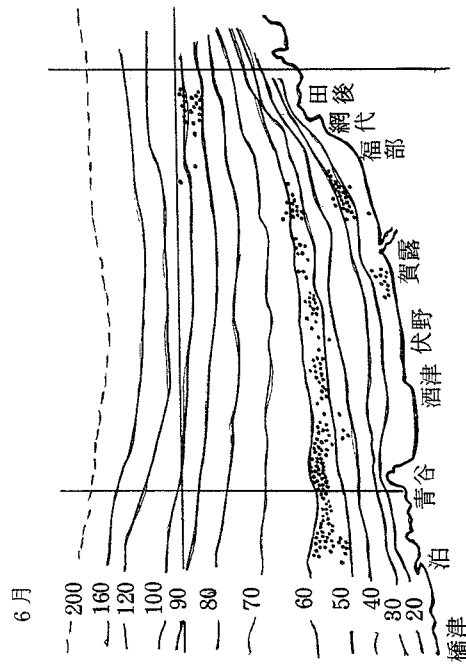
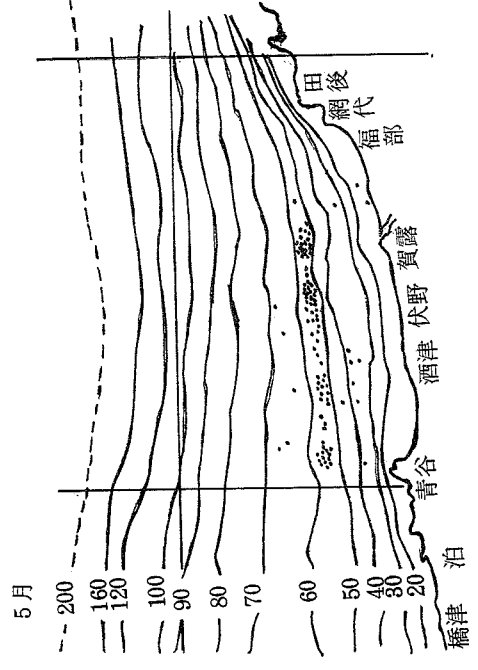
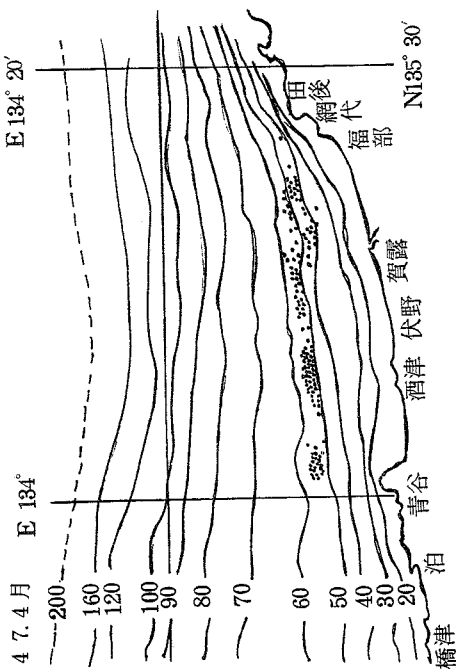
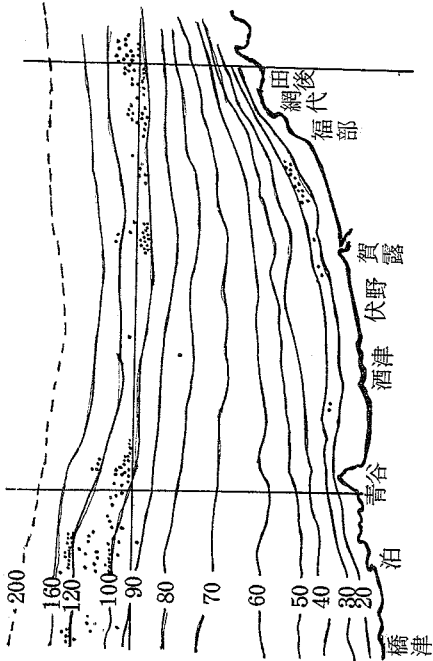
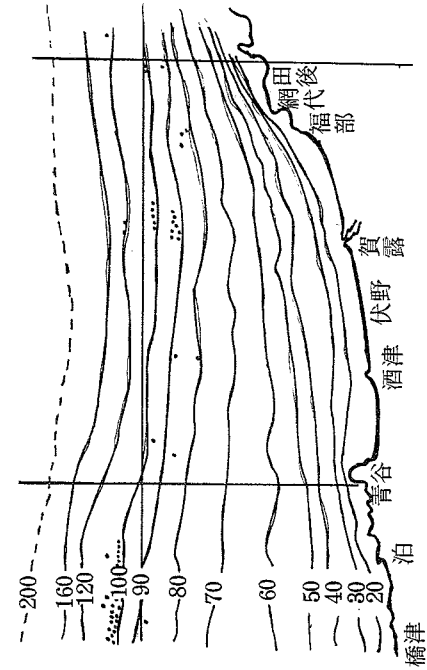


図 1 賀露小型底曳網標本船操業位置

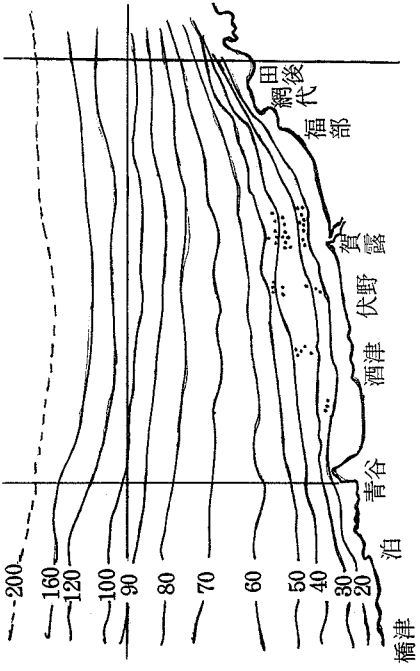
8月



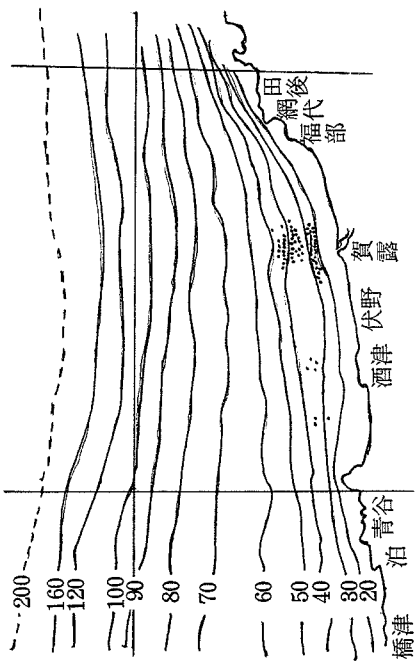
9月



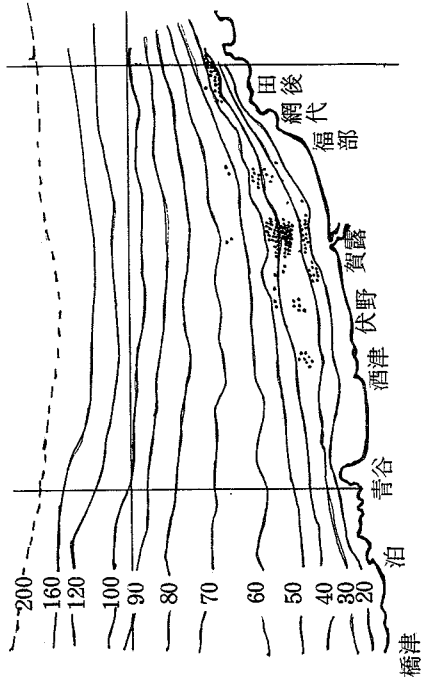
10月



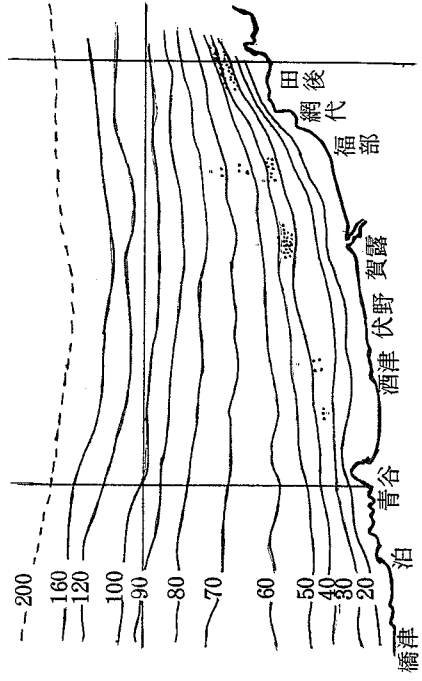
11月



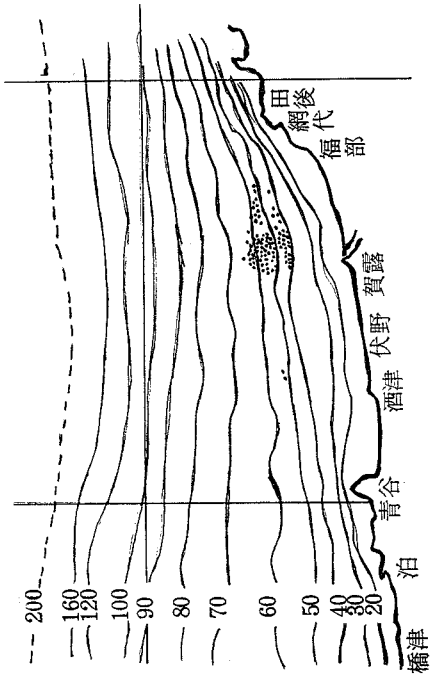
1 2月



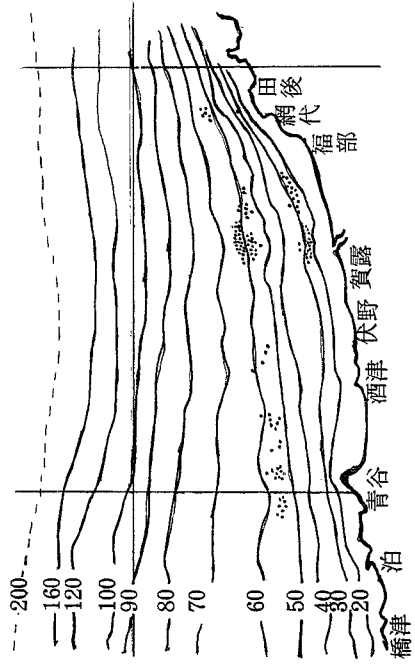
4 8.1月



2月

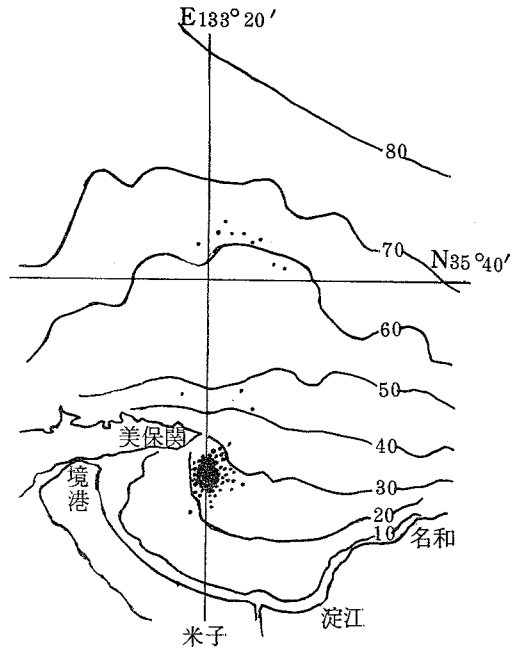
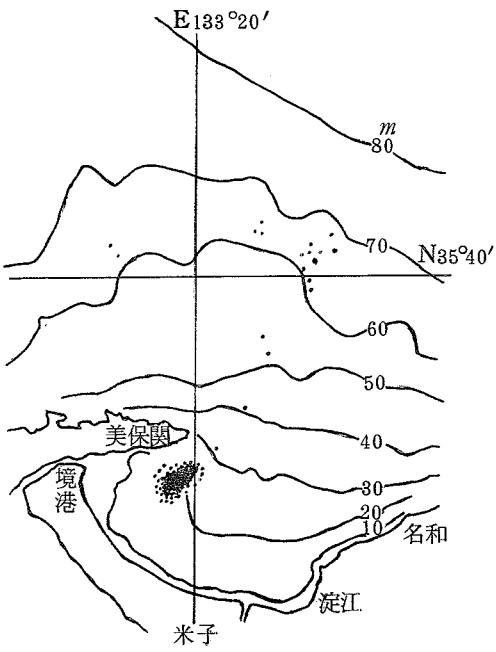


3月



4 7. 5月

6月



7月

8月

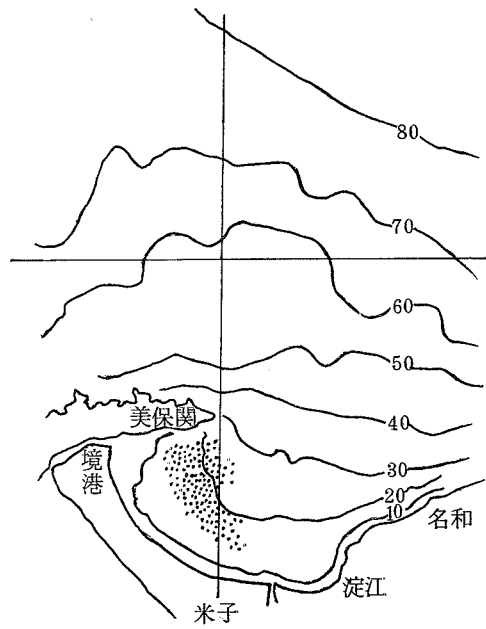
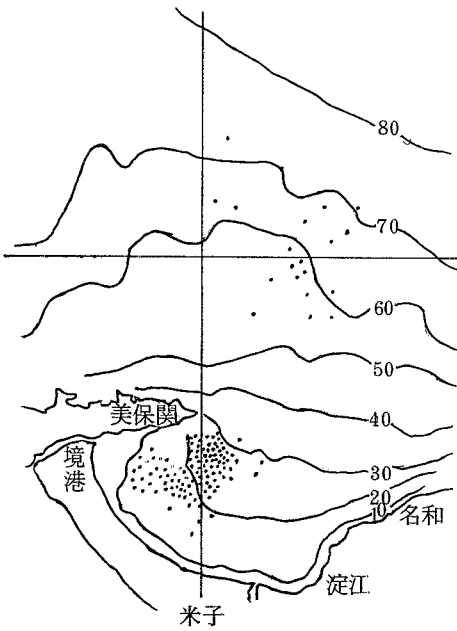
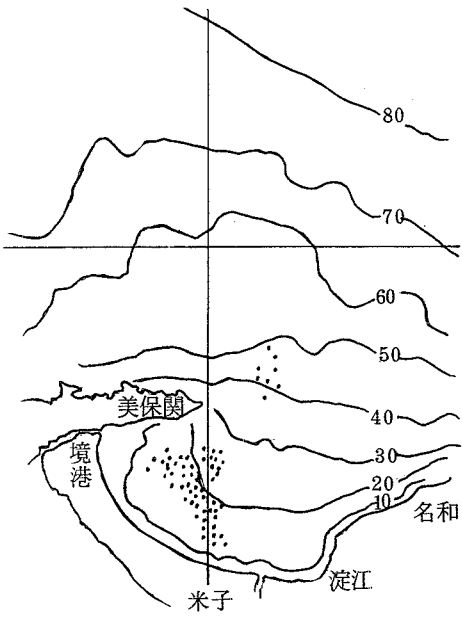
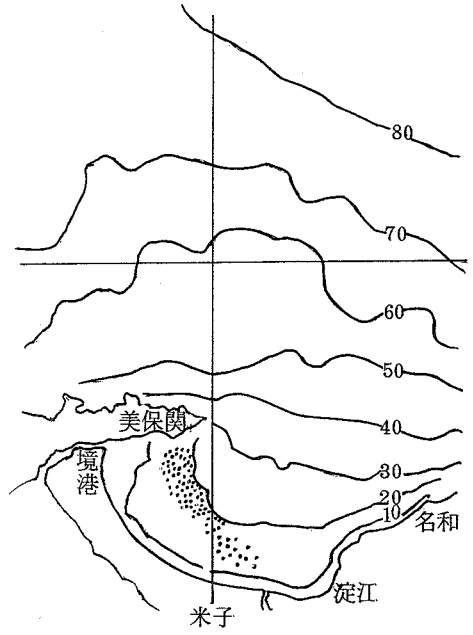


图 1-2 境港小型底曳網標本船操業位置

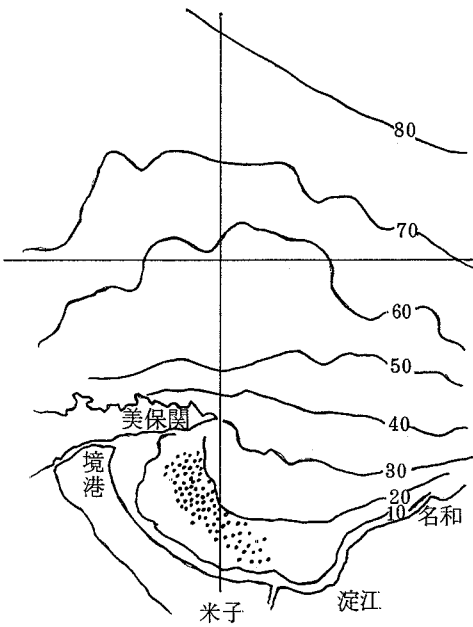
9月



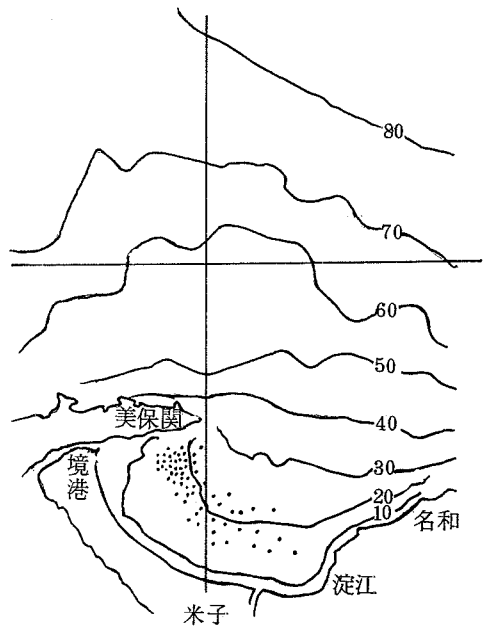
10月



11月

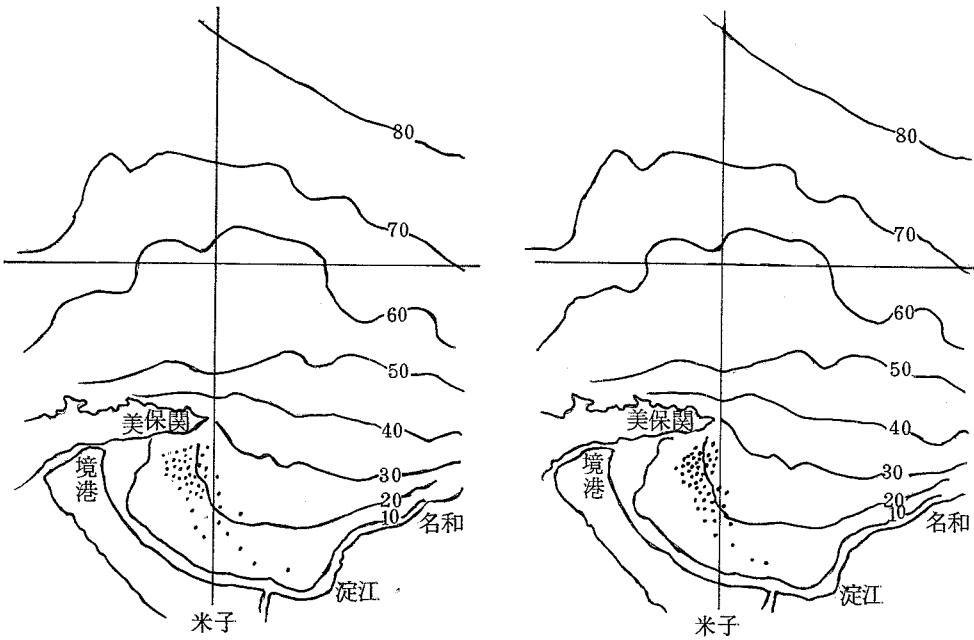


12月



48.1月

2月



月別水深別銘柄組成を図2で見ると、賀露船では小ヒラメは4~8月まで多いが、6月に74.4%と最高率を示し、50%以上は5、6、8月で順次減少する。中ヒラメでは秋期に多いが、10月に78.0%と最高率で6月に25.1%と最低率を示している。大ヒラメでは冬期1~3月10%以上で3月12.2%と最高率を示すが、夏期2%以下でとくに少ない。境港弓北船では小ヒラメは10月以降多く11月を除けば2月まで90%以上を占め、他の月も7月の51.1%を最低に50%以上を示し、賀露船とは出現の様相を異にしてい

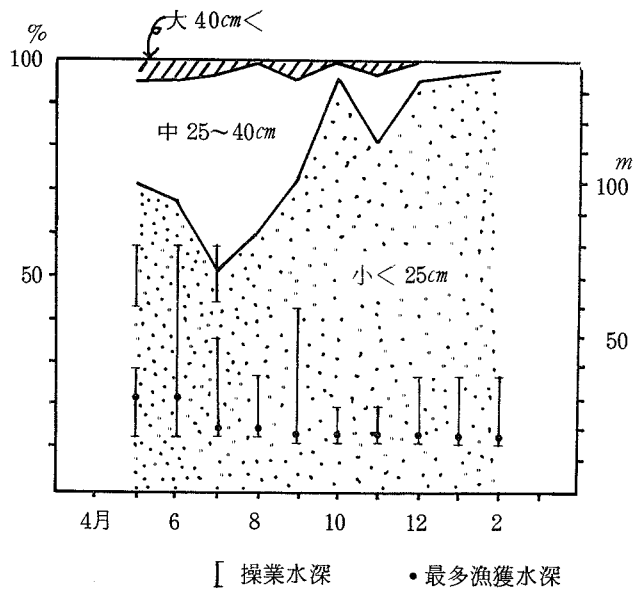


図2-1 境港におけるヒラメ月別銘柄別組成

る。中ヒラメでは春～夏に多く7月では47.3%の最高を示すが、いづれも50%以下で、とくに10月以降激減し冬期では1%を割っている。大ヒラメでは春期若干みられ、5月が4.1%と最高である。賀露と弓北では前者はヒラメは春～夏多く、後者は秋～冬多い。また中ヒラメはその逆となっている。賀露は外洋水の影響をそのまま受けるが境は陸水の影響を多く受け地理的条件は大きく異なり、ヒラメ出現の様相も異なるものと考えられる。

月別操業日数を図3でみると、操業日数では夏期が多く、7月賀露17.2日、弓北21.5日で冬期になるに従って減少している。また秋期9～11月は賀露ではソデイカ釣獲を目的としたためである。弓北は美保湾の地形上、賀露に比し操業日数は多い。曳網回数は操業日数と傾向をほぼ同じくし、7月に最高を示して賀露53.4回、弓北67.5回であるが、冬期では賀露存弓北とも大差がなくなっている。

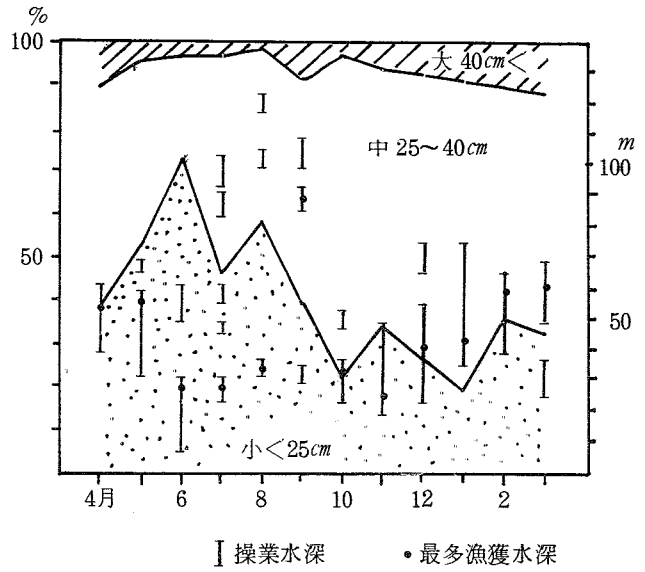


図2-2 賀露港におけるヒラメ月別銘柄別組成

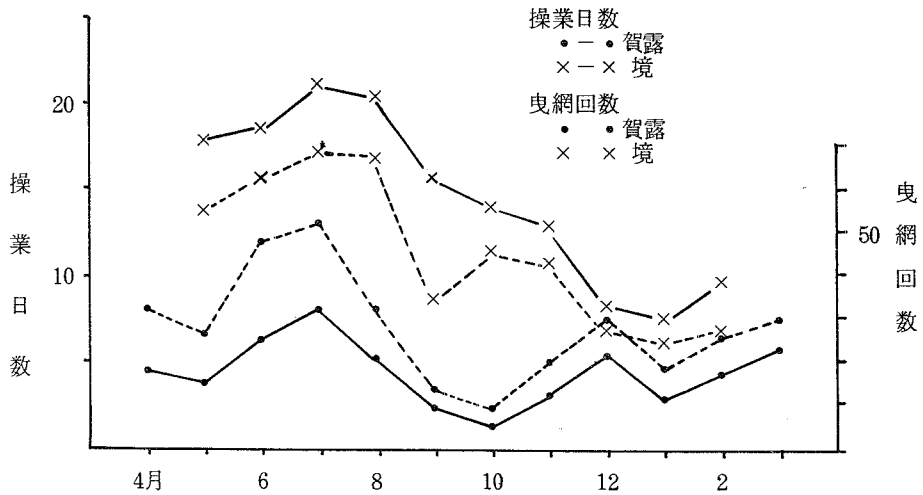


図3 小型底曳網標本船、月別操業日数・曳網回数

曳網時間でみると図4のとおりで、夏期長く冬期短い傾向がみられ、賀露では1～3時間であるが、境港では1時間30分～2時間30分ではほぼ一定しており曳網時間が短い。これは1隻当り漁場面積の狭隘からくるものであり、対象魚種、1㎡当り魚群密度の差異、網の大小などの関連も考えられる。

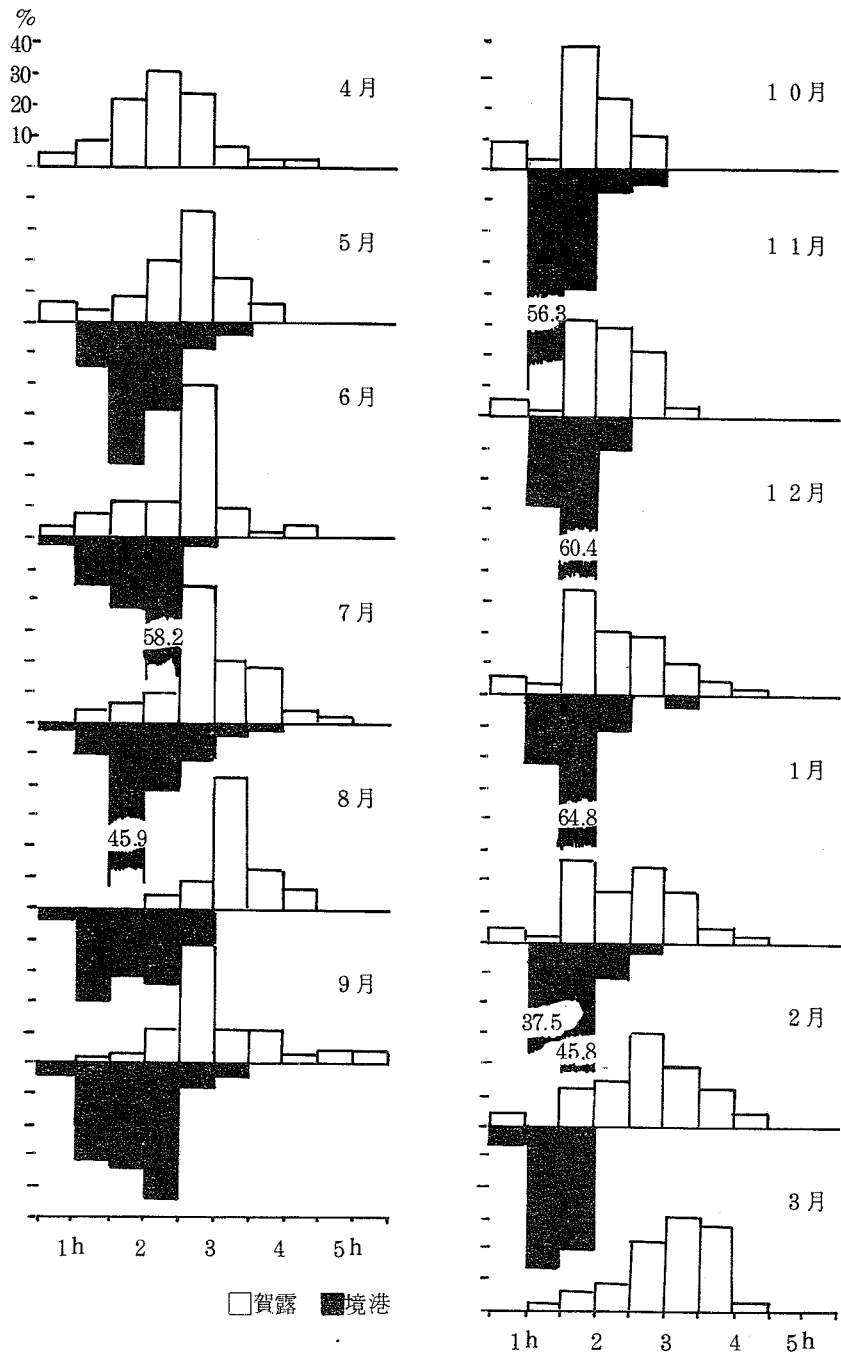


図4 小型底曳網標本船の月別曳網時間

統計的に本県のヒラメをみると、沿岸漁業のなかでは重要魚種であり、漁獲強度の質的变化は年とともにみられるが、漁獲量の経年変動は図5に示す昭和44年の最高198トンまで増加傾向をみせ、近年に至って120トン台の安定化傾向に転じた。

漁業種類としては小型底曳網（桁網）、2そう曳機船底曳網、釣三重網（刺網）、1そう曳機船底曳網の順で漁獲されるが、図6に示すとおり近年では80%を小型底曳網で占めている。地域別にみると図7に示すとおり境港（弓北）、賀露、泊の順で県下三大河川の日野川、千代川、天神川の河口域を中心として、夫々東西に拡大され漁場が形成されている。地域的に首位を占める境港の小型底曳網船の月別1曳当りの漁獲をみると、秋期が多くとくに11月が最も多く200～350kgに達している。

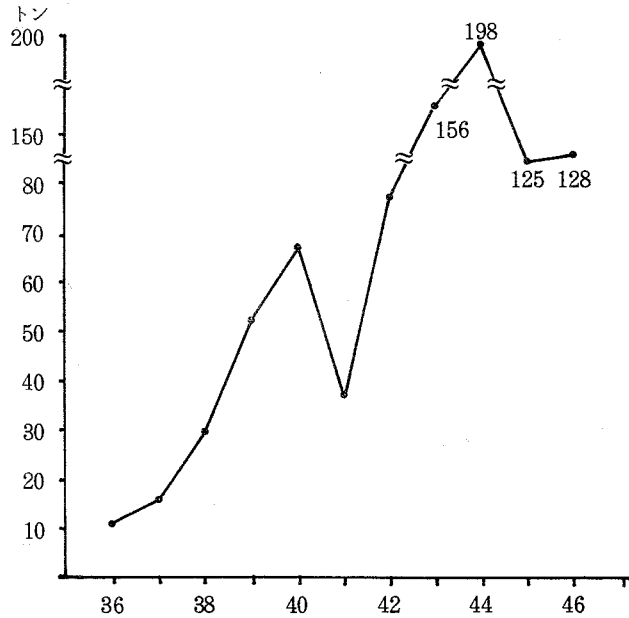


図5 鳥取県におけるヒラメ漁獲量

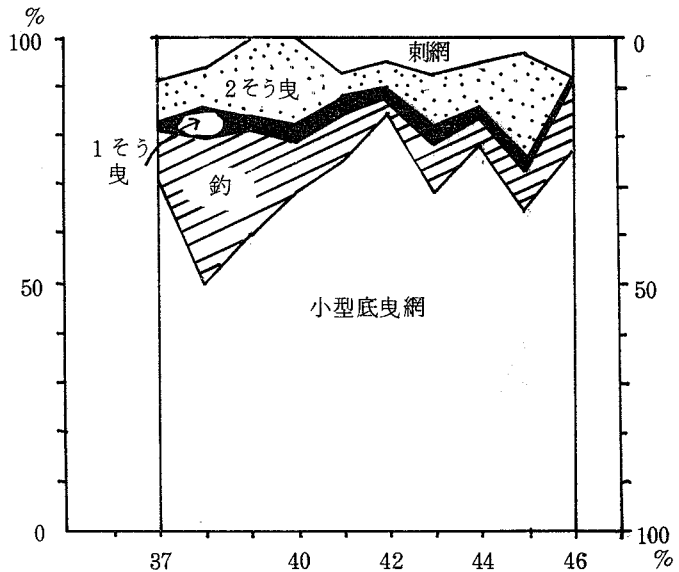


図6 漁具漁法別ヒラメ漁獲量

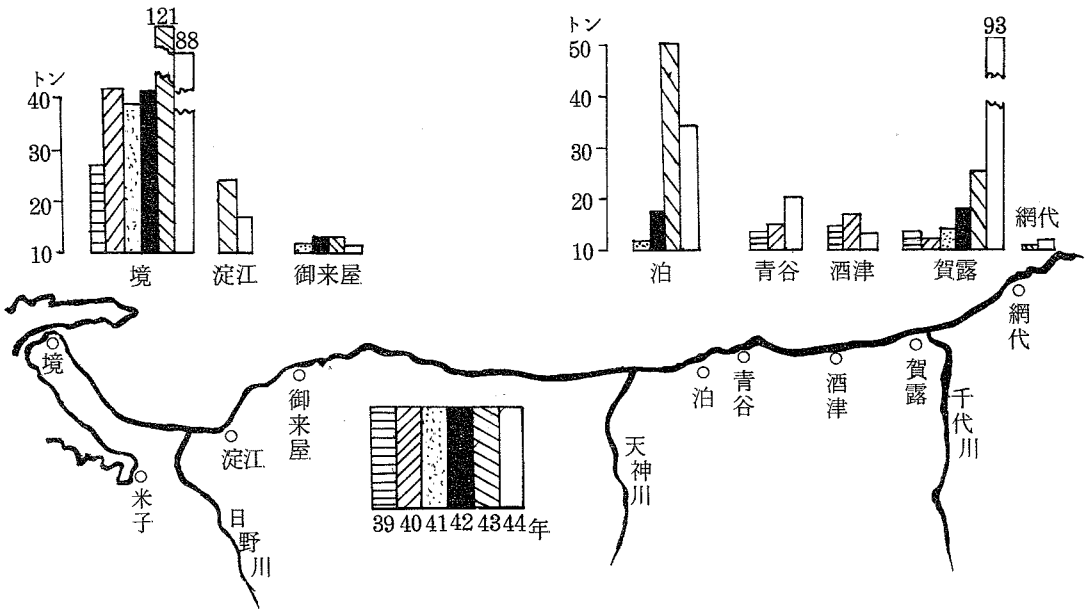


図7 鳥取県における地域別ヒラメ漁獲量

小型底曳網の漁獲物組成を46年でみると図8のとおりで、これを42～46年の5ヶ年平均でみると、図9のとおり、カレイ類27.5%、ヒラメ13.4%、イタヤガイ13.3%、エビ類8.2%、マダイ3.7%、その他33.9%となっている。

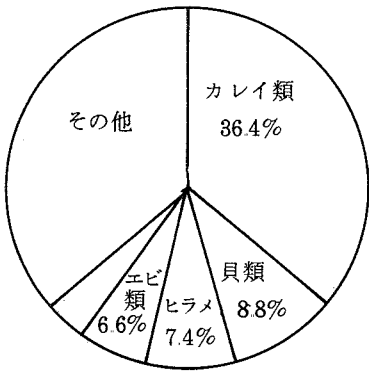


図8 昭和46年小型底びき網魚種別漁獲比率
漁獲量1,330トン

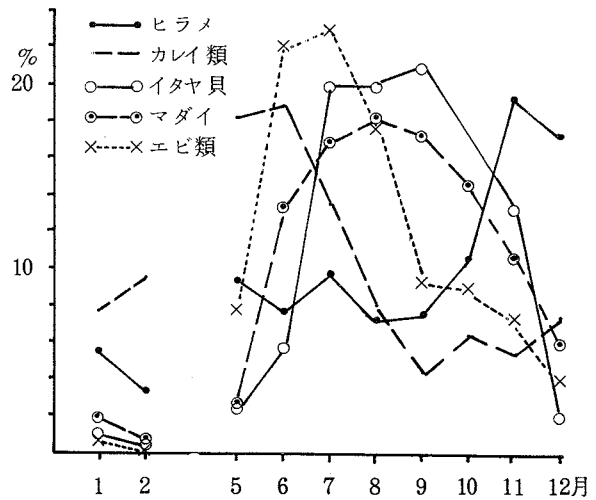


図9 境小型底びき網魚種別月別漁獲比率
(1965～1972年平均)

要 約

昭和47年4月から48年3月まで漁業実態をはあくするため標本船調査および統計調査を実施した。

1. 鳥取県のヒラメ漁獲状況は昭和44年198トン进行ピークに増加傾向から近年120トン台の安定傾向に転じた。
2. ヒラメ漁獲の80%は小型底曳網(桁網)、1そう曳機船底曳網の順である。
3. 地域別では境港、賀露、泊の順で11月には1曳網200~350kgに達する。
4. 賀露小型底曳網のヒラメ月別銘柄別組成の最高率はずぎのとおりである。

小ヒラメ(25cm以下) 6月 74.4%

中ヒラメ(25~40cm) 10月 78.0%

大ヒラメ(40cm以上) 3月 12.2%

5. 漁場の動きをヒラメについて時期的、水深別にみるとづぎのとおりである。

春期(4~6月) 水深50~60m 秋期(10~12月) 水深35~40m

夏期(7~9月) 100~115m 冬期(1~3月) 40~60m

ヒラメの生活史および漁業実態調査 (聞きとり調査)

梶 川 晃

調 査 方 法

対象魚種について、前述の漁業種類別に発育段階別の出現時期、場所、混獲魚種、捕食餌料等について、聞き取り調査を実施した。

結 果 と 考 察

本県においてヒラメを漁獲している主な漁業種類では、小型底びき網、三重網、一本釣り、二そう曳があり、その漁獲量等については前述のとおりである。

発育段階別、各漁業種類別に聞き取りをまとめたものが表1で、要約すると以下のとおりである。また、漁業種類別の各発育段階の漁場図は図1のとおりである。